大和大学　研究紀要　第４巻　教育学部編　2018年３月　pp.31～36

コミュニケーション力を身につけ、「共に育ち合う子ども」の育成
－友だち同士のかかわりを深める保育の工夫－

Nurturing preschool children who develop communication ability and grow with peers
Attempts in child care and education to deepen their involvement in friends

阪　上　節　子
SAKAUE Setsuko

要　　旨

本研究は４～５歳児クラスの保育実践として取り組んだ，日々の生活や遊びの中での友達との関わりや異年齢児との交流活動の事例を通して，その中で見られる幼児期の「人と関わる力を身に付け，共に育ち合う子ども」とはどのような関わりなのか，興味・関心・場の共有・思いやり・協力・異年齢児との関わりの体験や経験を経て獲得していくコミュニケーション力の育ちと，共に育ち合う子どもの育成から論考した。その結果として①してみたいと感じた事に取り組むことの出来る環境を用意することで，友達の遊びに興味を持ち積極的に遊びを展開するようになる。②自分の思いを言葉で伝えイメージを共有することのできる共通の体験を題材に取り入れる。③自分の過去の経験を思い出し，他児の思いに共感しながら，他児の立場に立ち，思いやりの行動が出来るようになる。④ストーリーを具体化し共通理解できたことで絵本作りを楽しめるようになる。⑤友だち同士のかかわりを深めるための保育内容，環境構成などのあり方を考えること。子どもの「興味・関心」「異年齢児との関わり」「協力」と教師や友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わうための環境構成や援助の工夫に着目した結果，見えてきたものも追記の必要があることが明らかになった。

Abstract

This study examines cases of 4- and 5-year-old preschool children who become involved with their peers and engage in mixed-aged interactions in daily life and play, as seen in the practice of child care and education. The nature of this involvement, as seen in those children who “develop the ability to become involved with others and grow with their peers” in the preschool period, is discussed with consideration, first, of the development of communication ability acquired through interest and concern, situation sharing, consideration, cooperation, experiences and learning through mixed-aged interaction; and second, consideration of the nurturing of children growing in the company of their peers. The findings indicate that (1) children take interest in friends' play and actively engage in it when an environment is provided that allows them to engage in activities of interest; (2) teachers should help children introduce shared experiences into their stories, experiences whose images can best be shared among themselves by conveying thoughts into words; (3) children learn how to put themselves in each other’s shoes and behave considerately by remembering their own past experiences and sympathizing with the thoughts of others; (4) children enjoy making a picture book that allows them to give shape to their stories in a manner that promotes shared understanding; and (5) teachers should choose child care and education content, structure the environment, and employ teacher encouragement to foster a deepening of children’s mutual interaction. In addition, we should discuss new findings that will be obtained as a result of focusing on children's interests and concerns, mixed-aged interaction, and cooperation, as well as on teachers’ attempts at formation of the environment and support of children’s enjoyment of mutual play so as to benefit children.

キーワード：興味・関心，異年齢児との関わり，問題意識，協力
keywords：interest and concern, mixed-aged interaction, cooperation, formation of the environment and support

Ⅰ．はじめに

近年,『幼稚園要領解説』（2008年告示）「第一章総説」の「子育て支援」において，基本的生活習慣の欠如，コミュニケーション能力の不足，自制心や規範意識の希薄化といった問題が指摘されている。この背景には，少子化，核家族化，情報化，経済的な格差による人間関係や地域社会における地縁的な繋がりの希薄化等により，家庭や地域社会の教育力の低下によって，人として生きる

*大和大学教育学部
平成29年12月12日受理

力の育ちや幼児期からの心の育ちを支える保育のあり方が課題であると示された。

今日,『幼稚園教育要領』(2008年改正)の領域,人間関係において,「身近な人と親しみ,かかわりを深め,愛情や信頼感をもつ」ということが示されている。内容の取扱いにおいて「幼児が互いにかかわりを深め,協同して遊ぶようになるため,自ら行動する力を育てるようにするとともに,他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにする」と新たに加えられた。教育基本法第11条「幼児期の教育は,生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである(中略)」,学校教育法第22条「幼稚園は,義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとしと(中略)」と明記され,幼児期の教育の重要性が明確に位置付けられた。

幼稚園生活の中で子ども達は,日常のふとした出来事から友達と様々な心を動かす出来事を共有し,互いの感じ方や考え方,行動の仕方などに関心を寄せ,それらが行き交うことを通して,それぞれの違いや多様性に気付いていく。本研究で取り上げる“共に育ち合う子ども”とは友達のよさに気付き,一緒に活動する楽しさを味い得られるもの(充実感・身近な人と親しみ,関わりを深める経験を経て獲得していく愛情・信頼感・態度など)を指す。そこで,保育実践の中で見られる異年齢児活動での関わりや友達との協力活動を分析・考察することを通して,活動の中で見られる“共に育ち合う子ども”を保育者としてどのように理解し,「興味・関心」「異年齢児との関わり」「協力」に着目して共に育ち合いを広げたり深めたりしていくような保育実践をどのように行っていけば良いかという視点を提示することが本研究の目的である。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象園と事例の抽出

筆者が2015年度～2016年度に大阪府私立S幼稚園で実施した。園内研修の事例を基に分析を行う。この園内研修では,午前8時30分～12時までの日常の保育を観察し,その日の午後1時～3時まで,園長,幼稚園教諭,養護教諭と筆者で,それまでの保育実践事例を出し合いながら保育カンファレンスを実施した。

園内研修では「コミュニケーション力を身につけ,共に育ち合う子どもの育成」といったテーマで取り上げてクラスの保育実践事例を基に,筆者がその日に観察した保育や子ども達の様子を踏まえながら,その事例を掘り下げ,意味づけを行った。そこで検討された事例は,6事例(4歳児3事例,5歳児3事例)であったが,本研究では「興味・関心」や「異年齢児との関わり」「問題意識」「協力」に着目して下記の表1の3事例をとり上げて分析を行った。

表1　3事例のテーマ　一覧

4歳児 〈2015年10月〉	5歳児 〈2015年10月〉	5歳児 〈2016年10月〉
①紙芝居が始まるよ！	②手をつないで 走ったよ！	③お話し作り！

2. 事例の考察の観点

・「遊びに興味や関心活動への道筋」
・「異年齢児との関わり活動も,その過程において幼児なりの問題解決の過程を含んでいる」
・「友だち同士とかかわる活動における,目的意識・協力のコミュニケーション力も捉える」

Ⅲ. 事例と考察

各事例において,数か所を下線しているが,これは考察する際の該当箇所を分かりやすく示すためのものである。

1.〈事例1〉友だちのしていることに興味や関心を持つ「紙芝居がはじまるよ！」

幼児は,この日の好きな遊びの時間にした遊びの紹介をした。Y児は,友だちが5歳児とサッカーをした事や,園庭でどんぐを使ってケーキ屋さんごっこをしたことなど紹介している間,立ち歩いたりふざけていた。教師は他児が発表している遊びをY児に具体的に伝えながらY児が友だちの話に興味が向くように誘いかけた。Y児は「わかった」と言って友だちの話に興味を示す姿は見られなかった。しかし,T児が紙芝居の紹介をを始めるとY児は列の1番前に座って話を聞き出した。

紙芝居を作っていたのは,T児とM児の二人だった。最初にT児が作った紙芝居を紹介した。次にM児が作った紙芝居を紹介しようとすると,Y児が「Yの番」と言ってM児が描いた紙芝居を持ち立ち上がった。M児が「ぼくの紙芝居」とY児に言うが,Y児は「Yもしたい」と言って取り合いになった。「Mちゃんが作った紙芝居だから返してあげて」と,他の子ども達が声をかけると,「Yもしたい」と言ってY児は紙芝居を離さない。そこで,教師がY児に「今日はMちゃんの作った紙芝居を見せてもらって,明日Yちゃんの作った紙芝居をみんなに見てもらおう。Yちゃんがどんなお話しを作るのか楽しみだな」と声をかけ,M児に紙芝居を返すように促した。そして,M児の作った紙芝居をY児と一緒に見た。

翌日,Y児が紙芝居コーナーで遊びが出来るよう

に,(製作材料や紙芝居台,道具)を準備し,Y児に「先生,今日はYちゃんの紙芝居を見るのが楽しみです」と声をかけた。

Y児は紙芝居コーナーに行き，紙芝居台から顔を出したり，白紙をめくる真似をした後，教師に「紙芝居を作る」と言って紙に絵を描き始めた。数枚の絵を描くと，紙芝居を作っていたM児たちにY児，「おもしろい」「楽しいです」「集まってください！」「始まりますよ！」と声をかけ自分の作った紙芝居を見せていた。

事例１では，10月中旬過ぎてもＹ児が遊びを見つける事が出来ず走り回っていた。M児が描いた紙芝居を発表しようとした時，Y児も発表したい気持ちになり,「Y児もしたい」とM児と取り合いになり興味を示し「自己主張」した。教師から「明日，Mちゃんの作った紙芝居みせてね」の言葉がけにY児,「我慢」して，明日へ期待を持ち活動を楽しみにして，翌日，紙芝居コーナーに行き,「紙芝居を作る」出来上がると「集まって下さい」「始まります」と楽しみながら展開し,「顔を出す」「白紙をめくる」といった充実感や「始まります」といったY児は「友達と関わり一緒に活動する楽しさを味わいたい」に変わったと考えられる。また，遊びの中で，友達のよさに気付き，共通の目的を見出し，３歳児なりの工夫が見られる。自分のやっていることに共感してほしくて,M児ちゃん達に「おもしろい」「楽しい」などと「興味・関心」を持って共感を得るような伝え方や言葉，行動が見られるといった特徴が見られた。

２.〈事例２〉異年齢児とのかかわり
「手をつないではしったよ！」

運動会も終わり，５歳児がしていたバトンリレーに４歳児も加わり一緒に遊んでいた。

赤チーム４歳児H児は２番目でバトンを受け，トラックの後方から内側を走り１位になって次の走者にバトンを渡し，そのまま赤チームが１位でゴールした。全チームがゴールした後，教師が順位を発表したが，H児がルールを守っていなかった事を指摘する子どもは誰もいなかったので，２回戦を行うことを呼びかけた。

２回戦をする為に各チームが並びはじめた時，白チームの５歳児のM児がH児と同じ赤チームだった５歳児のA児に「さっき，Hちゃん線の中を走ってた！」と言った。A児は「だってHちゃん，初めてだったのでルールわからんもん」と答えると，M児が「でも，ルールいはんして勝ってはダメ」と言った。A児がM児に「じゃあ，教えてあげる」と言うと,二人はH児の所へ行き,「お姉ちゃんが走るから，見てて」と言った。A児が走り，それを見ながらM児が「線の外を走り，中を走ったらダメ」とH児に説明をした。H児はうなずいて見ていた。「Hちゃん１回走って見て」と言われ，H児は走りだすがトラックの内側を走った。その様子を見ていたM児が「AちゃんHちゃんと一緒に手をつないで走ったらいいんとちがう？」と提案した。H児とA児が一緒に手をつないで走り,M児は二人を応援した。トラックを１周した後，M児とA児が「ここ走るんよ。わかった？」H児に声をかけるとH児は大きくうなずいた。

２回戦は，H児は教えられたとおりにトラックの線の外側を走り，次の走者にバトンを渡すことができた。その様子を見たM児とA児は走り終えたH児に「できたね！」と声をかけた。２回戦の終了後，教師がM児とA児に「二人が教えてくれたからHちゃん，線の外側を走る事ができたんだよ」と声をかけるとM児とA児は「だってHちゃんパンダ組さんで，リレー初めてしたから，わからへんね」と満足そうな表情で話した。

事例２では，これまでもこの園では４歳児と５歳児の交流会や運動会に向けて取り組くできている。

子どもは運動会での活動に出会い，生き生きと繰り返し取り組み，交流会を重ねている。５歳児は年長児として相手の立場になって考えて行動しようとしたり，リーダーシップを取って遊ぼうと「お兄ちゃん，お姉ちゃんだから，パンダ組さんに教えてあげる」「困っていたら助けてあげる」といった気持ちや姿から幼児なりに問題解決の過程が見られた。また，４歳児は５歳児に親しみを持って慕う姿が見られるようになり，遊びやルールでの決まりを守り学ぼうとしている。それは憧れの気持ちを持って真似をしたり，興味を示して遊びに参加し，活動の特質を生かし，4歳児もバトンリレーの楽しさを味わうことが出来るよう，見本や一緒に走ることでお手本を示している。この異年齢児との活動は，その過程において幼児なりの問題解決の過程を含んでいる。

〈がんばったよ〉

3．〈事例３〉協力して遊ぶ
「お話し作り」

クラスの活動保育，小グループに分かれてどんぐりを題材としたお話し作りをした。Ｊ児のグループは，Ｅ児，Ｒ児の３人でお話し作りが始まった。

お話しの題材を話し合い，Ｊ児のグループは「お話しが決まった」と一番に教師に報告にきた。教師が話の内容を尋ねると，「Ｊちゃんが考えた話に決まり，どんぐりが散歩に出かけるの」とＥ児が答え，Ｒ児がストーリーを話した。

しかし，お話し作りが始まり，４日目にＪ児は「一人でするほうが上手く出来るから，一人の方がいい・・・。Ｊは一人で作っていきたい」とつぶやいた。その翌日には「Ｊはもうやりたくない！」と急に泣き出した。Ｅ児とＲ児は泣いているＪ児を困った表情をして見ていた。教師が話を聞くと「Ｊちゃんどうして一人でするほうがいいの？」Ｊ児「だってＪの言ったとおりにしてくれないもん！」Ｋ児Ｌ児「すること，ちがうって怒るもん！決まったとおりに作らないもん！もう！Ｊの言ったとおりにしてよ！！」と怒ってＪ児はＥ児とＲ児を見ていた。そこで教師は３人が今まで描いた絵を見ると，話しの途中からＥ児やＲ児はＪ児が考え，話し合ったストーリーやイメージとは違った絵を描いていた。Ｅ児，Ｒ児はどんなお話しだったか忘れていた。Ｊ君が考えたお話しで，今まで描いていたＥ児，Ｒ児の絵も机に並べてもう一度みんなで考え進めていくことになった。絵を見ながら，教師「このどんぐりさんは何をしているのかな？」Ｊ児「散歩にいっているの。大きな犬と会いどんぐりが迷子の犬のお家まで連れていくの」Ｅ児「小さい犬もいたの」Ｒ児「大きな犬は小さな犬に会いました。にしようよ」Ｊ児「一人しかいないから，たくさんのどんぐりさんを呼ぼうよ」Ｅ児の絵を見て「どんぐりがみんなでころがっています」と言おうＪ児「そうしよう！」Ｒ児「かくれんぼしています」と言った。Ｊ児が設定していたところまでのページの絵はできていなかった。教師「最後はどうなるの？」というとＥ児が「みんなで描く」と言うと，Ｊ児が「犬がお家につき，みんなで喜んでいるところにしよう」と言い，Ｒ児が「バンザーイをしているところにしよう」とそれぞれが考えていることを伝え合い，３人で最後のページの製作に取り組んでいた。

作った絵本を３人が発表した時は気持ちを合わせて読み出来上がった絵本を３人で大事に絵本場に置いていた

事例３では，Ｊ児は人なつこい性格ではあるが，自分の思いが強く，友だちと相談して遊びを進めていく姿が見られない。絵画製作は好きであり，豊かな発想を生かした作品作りをしている姿は周りの友だちからも認められている。Ｅ児やＲ児も自己主張が強い性格であったが，「Ｊ児の考えた話にする」といったのもＪ児の想像力豊かな姿を認めている。

絵本を作るという共通の目的はあるものの，役割分担をすることや，お互いの考えや話のイメージを話し合うことがないまま，それぞれが自分の思いだけで進めてしまったことで，絵本作りがスムーズに進まなかった。

Ｊ児の考えたストリーリにすると決まったが，３人の中で具体的な案が共通理解できていなかった為にトラブルが発生した。そこで，３人は今まで描いてきた絵を基にストーリーをお互いに伝え合い，調整したことで，共通理解できた。この事例のように，それぞれのよさを生かしながら協同して遊ぶようになるためには，集団の中のコミュニケーションを通して共通の目的が生まれてくる過程やいざこざの葛藤体験を乗り越えていく過程が含まれ，共に育ち合う子どもの姿が生まれている。

Ⅳ．まとめ

―この研究を通して次のことが明らかになった―

（１） 事例から得られた内容と質についてあることが明確になった。

本研究の3つの事例では，友達が楽しく遊んでいる姿から興味や関心，「どうすればルールを守って走れるか」「こうやってみたらどうなるか」を追求した異年齢児との関わりや「みんなで作るといった目的」「工夫や協力する」する姿が読みとれる。３事例とも，友達同士の関わりを深める中で，友達の手本をみたり，何度も挑戦したり，調整しながら，何度も繰り返したりしている様子が読み取れる。その中でコミュニケーションを身につけいくのではないかと考えられる。

事例Ｉでは，４歳児から５歳児の友達同士の関わりや深まりの育ちの道筋と考えると，４歳児，一人ひとり子どもの発達する姿はことなっている。友達と一緒に過ごす喜びを味わい「興味・関心」遊びを皆と作り出すといった喜びを見出している。

事例２では，これまでの遊びの経験を生かし，ルールを守らない友達がいると楽しい遊びにならず，その遊びも継続しない。４歳児も異年齢児と一緒に遊ぶ中で，楽しく遊ぶためには，参加者がルールに従うことが必要である大切さに気づく，当たり前のコミュニケーションではあるが，ここでは異年齢児が共に育ち合う活動を通して，質が変化していることがわかる。

事例３では，５歳児は自分の世界を友達と共有したいと願い，イメージや目的を共有するための手段として子

どもは言葉を使って意識表明し合い，自己の思いを出してぶつかり，折り合いをつけ，（反問や説明，調整）などの工夫や更に提案したりして，共に成長・発達を願う関係が築かれている姿から，協力する楽しさや充実感を味わう育ちと考えられる。

友だち同士の関わりを深める保育活動への育ちの中で「興味・関心」や「異年齢児との関わり」「協力」する姿や遊びの質が変化していることを踏まえると，そこでの共に育ち合う子どもの経験内容と質が変化して深まっているということは十分ありえることだと考える。

（２）　共に育ち合う子ども育ちの深化を通して

2013年４月に一藝社人間関係から出された「幼児教育の基本」幼児教育の特性を踏まえ，環境を通して行うことが基本であると言われている。幼児期における「コミュニケーション力を身につけ，共に育ち合う子どもの育成」いかに児童期「協同」へと繋いでいくかが需要な課題とされるが，そのためには，幼児期の「興味･関心」「異年齢児との交流的」「お話作り」など活動を一過性のものではなく，保育内容として積極的に遊びの場を設定し，友達同士の関わりが持てるきっかけや深化のためには保育者の関わりを意識することによって，友達同士関わって遊ぶ楽しさの意識化・自覚化を子ども達に引き起こし，深化していく一助になると考えられる。

以上のように，本研究テーマである幼児期に育ち合う遊びを通しての体験は，日々の保育において何度も積み重ねられ，子どもなりに問題解決の過程を通して，「目的意識」「協力」の共有化が図れる。「興味・関心」を持つ自覚化によって徐々に人との関わりの意識化がされる過程が事例で示されたと考える。

Ⅴ．課題

今後の課題として，①②③に示す。

①「コミュニケーション力を身につけて共に育ち合う子ども」の姿に迫っていくには，研究の視点をさらに絞り，環境構成や助言・援助の方法を探る。

②人とのかかわりに視点をおいた教育課程が人とのかかわりを深めていくためにも，子どもの成長に即した教育課程になっているか見直す。

③子どもが人とのかかわりを深めていくための体験や経験が出来る保育がすすめられるように，教師は個々に研鑽を重ね常に高め合っていける教師集団を築いていく。

本研究においては，３歳児から５歳児の幼児期の子どもの発達を踏まえて，保育実践における友達同士の関わりを深める研究的な活動における「友に育ち合う子ども」について検討した結果，その大きな流れを示すことができた。

今後の課題としては，例えば，３歳児，４歳児，５歳児の友達同士の関わりを深める活動の学びをより深く微細に分析し，理論を精緻化していくことや，保育者の援助や役割分担からの分析，環境構成などからの分析などまだ多数の課題が残った。今後は本研究を土台にして研究を積み重ねて行きたい。

Ⅵ．引用文献・参考文献

Ⅵ-１引用文献

1）瀧川光治「幼児期における探索・探究的な活動と子ども理解」～活動の広がりと深まりを見通すために～日本乳幼児教育学会第202回大会発表
2）文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館（2008）
3）塚本美知子･大沢　裕「著」人間関係　一藝社（2013）

Ⅵ-２参考文献

4）武藤　隆　「著」『事例で学ぶ保育内容＜領域＞人間関係』　萌文書林（2007）
5）国立教育政策研究所　『幼児期から児童期への教育』ひかりのくに（2005）
6）佐伯　胖　「著」『幼児教育へのいざない』東京大学出版会（2001）
7）文部省　『幼児理解と評価』フレーベル館（1993）
8）森上史朗・今井和子　「著」『集団ってなんだろう』ミネルヴァ書房（1992）